特　集

抽象的な作品を感じ取る

「抽象的な作品を鑑賞させるのは難しい」。
そのように感じられる先生は多いかもしれません。
しかし，子どもには，私たちが思う以上に自由な発想で作品を鑑賞する力があります。
本特集では，生徒たちが抽象的な作品からさまざまに想像を膨らませていきます。
さて，先生はどのように彼らの力を引き出していったのでしょうか。

撮影 鈴木俊介

作品を真横からじっと見つめる生徒。
※今回は，学芸員立ち会いのもとに鑑賞の授業が行われました。
通常は作品の保護のため，壁に身体をつけて鑑賞することはできません。



展示室に入る前に，これまでの授業の振り返りをする。

授　業　リ　ポ　ー　ト

目に見えないものを見よう!

大分県大分市立明野（あけの）中学校
佐藤 誠 先生 × 1年1組（生徒数 30 名） × 大分県立美術館

授業の舞台は，大分県立美術館。2015 年春にオープンした当館は教育普及活動に力を入れている。子どもたち向けのワークショップを企画するのはもちろん，学校の授業での活用も積極的に受け入れている。

今回は，大分市立明野中学校の生徒たちが美術館を訪れ，コレクション展を鑑賞する。彼らは本物の作品を前に，どのような反応を示すのだろうか。

前時を振り返ろう

生徒たちは，前時までに抽象画の制作をしている（P6-7 参照）。「音」を点・線・面で描いたり，「自分の手から聴こえる音楽」を色鉛筆を使って表現したりしてきた。また，それらの作品をみんなで鑑賞し，それぞれの作品から感じたことを付箋紙に書いて貼るという鑑賞活動も行っている。生徒たちは，「音」という目に見えないものを形や色で表すおもしろさや，抽象的な作品を鑑賞する楽しさを体感してきている。

佐藤先生は，美術館の展示室に入る前に，まず生徒たちに向かってこう切り出した。

「これまでの授業を振り返りましょう。スケッチブックを開いてください」

生徒たちは，自分の作品と，友達のコメントが書かれた付箋紙が貼ってあるページを開く。

「前の時間に，描いた作品をみんなで見合いましたね。付箋紙の友達のコメントをちょっと読んでみてください。描いた自分の意図とは全然違うことが書いてあったりするでしょう。作品は，作者の手を離れると，鑑賞者が自由にさまざまな見方をします。それが，美術鑑賞のおもしろさです。これから，展示室に入って作品を鑑賞してもらいます。これまで，『目に見えないものを見る』というテーマで授業をしてきました。最初の授業で，みんなは『目に見えないもの』として，音，におい，風，感情などを挙げてくれました。今日も作品から，それらのことを自由に感じ取ってほしいなと思います」

そして，生徒たちはスケッチブックを閉じ，ワクワクした表情で，展示室へ入っていく。





スケッチブックには，「自分の手から聴こえる音楽」を描いた作品と，友達のコメント（付箋紙）が貼られている。



髙山辰雄の迫力ある作品に,生徒たちはしばし目を奪われる。

地元の作家の作品を鑑賞しよう

展示室に入ると，大きな３対の作品が目に飛び込む。先生は，その前に生徒たちを集めた。

「この絵の作者が誰かわかるかな？」という問いに，生徒は「髙山辰雄さん！」と即答する。日本画家・髙山辰雄は，大分県大分市出身。県内では，毎年「髙山辰雄ジュニア美術展」が開催されるなど，生徒たちにとって，最も身近な作家の一人だ。

今回の授業は，抽象的な作品を主体的に鑑賞することがねらいだが，佐藤先生はあえてこの具象画を取り上げた。生徒たちにとって身近な作家の作品であることと，この作品は線画で色がほとんど使われておらず，具象画でありながら，抽象画に近いのではと考えたためだ。

「作品をよく見てください。さあ，何が見えるでしょう」と先生が投げかけると， 生徒たちは，「牛」「女性」「太陽」「星」など，見たままに次々と意見を述べていく。

「牛がいて，女性がいる。これ（中央の絵に丸く描かれているものを指して）は，太陽か星かよくわからないけど，何かが宙に浮いている。じゃあ，みんな，この絵から何が感じ取れる？ 前の授業で，友達の作品を鑑賞しましたね。作品から音楽や感情を感じ取りました。そのときと同じように感じてみよう」。先生がそう問いかけると，生徒の発言は，徐々に「目に見えないもの」へシフトしていく。

生徒 1「悲しい」
生徒 2「牛と仲良し」
生徒 3「孤独」







「明星」髙山辰雄　紙本彩色　左右各171.3×356.0cm　中央210.7×139.0cm　1985年

生徒 4「寂しい」
先生「三つの絵があるけど，どうなんだろう」
生徒 5「ぜんぶ同じ人」
先生「なるほど。『ぜんぶ同じ人』と思う人は手を挙げてみて」
（複数名の生徒が挙手）
先生「そうか。じゃあ，同じ人ってことは，この３枚の絵は場面が違うのかな」

女性の心情について考え始めた生徒たち。そして，先生が「場面」という言葉を出したことにより，さらに見方が深まっていく。

生徒 6「（右から絵を順に指して）初め・中・終わりになっているんじゃないかな」
先生「物語になっているってこと?」
生徒 6「そう。（右の絵を指して）初めに牛と出会って，（中央の絵を指して）仲良くなって，そして（左の絵を指して）お別れ」

この発言が引き金となって，生徒たちは，３枚の絵からストーリーを紡ぎ始める。先生は，太陽のような星のような丸いものが描かれている中央の絵を指して，「物語なのだとしたら，この絵の時間はいつだと思う？」と投げかけた。

生徒 7「親に見捨てられた少女が牛と遊んでいる場面。寂しいから夜だと思う」
生徒 8「わたしには月が光を放っているように見える。女性は，胸に手をあてて悲しい気持ちでいるような気がするから，夜だと思う」
生徒 9「月だったら，白く描くんじゃないかな。だから，これは太陽」
生徒 10「明るい感じがするから，昼間だと思う」



授業展開（全7時間）
生徒の活動

第 1 時［導入］

「音」を描く

●オノマトペの「音」を聴き，点と線で描く。次に，点と線と面で描く。
● R. シュトラウスの「アルプス交響曲」を聴き，点と線と面で描く。

【指導上の留意点】点・線・面の描画のさまざまな例を示す。筆圧・太さ・繰り返しの効果を工夫することや,定規やコンパスを活用することを伝える。

第 2~4 時［表現］

「手から聴こえる音楽」を描く

●自分の心情を表す手のポーズを考えさせ，ゆっくり１本の線で陰影をつけずに描く。
●手から発想して音楽を感じ取り，色鉛筆などを使って表現する。

【指導上の留意点】手の形を延長した線や動きの線で画面分割していく手法,リズム・和音・強弱といった音楽の要素を,筆圧や塗り重ねによって表現することを例示する。

生徒作品





第 5 時［鑑賞］

鑑賞会をする

●作品を机上に置き，友達の作品を見て回る。
●友達の作品から感じ取ったことや，聴こえてきた音楽を付箋紙に記入し，作者の机上に貼り付ける。

【指導上の留意点】鑑賞させる前に,音楽を表す言葉（調和・緊張感・奥行・強弱・響き…など）を示す。また,鑑賞は静かな環境で行い,作品から聴こえてくる音楽に耳をすますよう伝える。

鑑賞会の様子



第 6 時［鑑賞］

美術館で鑑賞する

●美術館へ行き，地元の作家の作品や，抽象的な作品を鑑賞する。

（今回,紙面でご紹介しているのは,第6時の様子です。）

第 7 時［まとめ］

自分の考えをまとめる

●美術館で鑑賞した感想や，これまでの授業の感想を，ワークシートに記入する。

【指導上の留意点】ワークシートには,美術館から借りた図版を使い,生徒が作品を思い出しやすいようにする。

指導計画

準備するもの	生徒：筆記具, 色鉛筆, 定規, コンパス 教師：音源, 付箋紙, 画用紙, 抽象的な作品の図版
学習目標	●「音楽」や「手」から感じ取ったことや想像したことを基に，形や色を工夫して表現することができる。 ●抽象的な作品を，主体的に鑑賞することができる。
評価規準	●目に見えないものを表現することを楽しみ，また抽象的な作品を鑑賞して味わおうとしている。（美術への関心・意欲・態度） ●音楽や自分の感情などから発想を広げている。（発想や構想の能力） ●偶然にできる形や色の効果を生かしている。（創造的な技能） ●形や色の使い方や表現の工夫について話し合ったり，抽象的な表現からイメージを広げたりするなど，主体的に作品を鑑賞しようとしている。（鑑賞の能力）



作品から物語を想像し始め,生徒たちは熱気を帯びてくる。

生徒 11「(右の絵を指して) 朝に出会って,(中央の絵を指して) 昼に遊んで,(左の絵を指して),夜に別れる」

中央の絵については,夜の場面か昼の場面なのかで,意見が割れた。そして,やや沈黙があった後,ある生徒が口を開いた。

生徒 12「先生,(左の絵を指して) 子牛が泣いているように見えませんか」
(他の生徒たちも,次々に「見える」と同意する)
先生「子牛が泣いている? なぜ?」
生徒 12「別れが寂しい」
生徒 13「牛に子どもが生まれて,女性と別れることになったから」
先生「(右の絵を指して) 牛と出会って,(中央の絵を指して) 仲良くなって,(左の絵を指して) 子どもが生まれた。……ということは,この3枚の絵には,長い時間が流れているのかな」

「長い時間」という先生の言葉に,生徒が「あっ!」という顔をした。

生徒 14「先生!これ春夏秋冬だと思います」
先生「四季を描いているってこと?」
生徒 15「服装が,右から,半袖→半袖→長袖になっているでしょう」
(他の生徒たちから「おおーっ」と歓声が上がる)
先生「なるほど。じゃあ,これ (右の絵) の季節はいつ?」
生徒 16「夏!」
生徒 17「いや,出会いの春だよ」
先生「じゃあ,中央の絵は?」
生徒 18「夏」
先生「じゃあ,左の絵は?」
生徒 19「秋か冬」



学芸員の説明に耳を傾ける生徒たち。

服装の違いに気づいた生徒たち。授業はどんどん盛り上がり,作品からさまざまな物語が生まれる。

先生は一通り意見を聞いたところで「みんな,この作品からいろいろなことを感じ取ってくれましたね。今日は学芸員さんが来てくれていますので,髙山辰雄さんのことや,この絵について少し教えてもらいましょう」と告げた。

そして,学芸員の吉田さんが,作品の題名は「明星」であること,髙山は天文学に興味を抱いていたことなどを説明。また,中央の作品だけが縦長なのは,横長の2枚の絵の間に縦長の画面を挟むことで,空間の広がりを出したいという作者の意図があることを説明した。さらに,「髙山辰雄は,目で見たものを描く人ではなく,自分の心を描く人でした。ですから,この作品も実際にこういう風景を見て描いたのではなく,髙山さんの心の中を描いたのだと思います」と話した。

先生は「今のお話を聞いて,もう一度,この作品を感じ取ってみてください。髙山さんの心の中に入り込んでみましょう」と言い,3分ほど時間をとった。

生徒たちは,絵をじっと見つめ,心地よい静寂の時間が流れた。

抽象画を鑑賞しよう

次に,抽象的な作品が展示されている部屋に移動。先生は「部屋をぐるっと見渡して,気になる作品を指でさしてみて」と言った。すると,多くの生徒が画面いっぱいに水色の絵の具が力強く塗られた作品を指した。

「じゃあ,この大きな作品を鑑賞しよう。近くで見たり,下からのぞきこんだりしてごらん」。先生がそう告げると,生徒たちはさまざまな角度から作品を見始める。「どうですか?何を感じましたか」と先生が問いかけると,生徒たちは次々と意見を出していく。

生徒 1「おたまじゃくしが,下から上に,わーっと集まっている感じ」
生徒 2「雨だと思う」
生徒 3「(手を上下にうねるように動かして) 波のよう」
生徒4「ゴツゴツした感じ」
先生「どんな音が聴こえる?」
生徒5「ザーッという雨の音」

水のイメージで発言する生徒が多く,先生はあえて「水以外だったら,何に見える?」と尋ねた。

生徒6「光」
先生「どこからそう思うの?」
生徒7「上のほうでパーッと光が出て。それで,周りに広がっていく」
先生「このボコボコしたところから,光がパーッと出て,下に落ちるイメージ?」
生徒7「はい。(と言いながら,手を頭の上に広げて,ひらひらと下に落ちていく動作をする)」
生徒8「ああ,花火だ」
(他の生徒も「そうだそうだ」と同意する)
先生「花火ってことは,暑いの?」
生徒9「いや,暑いけど涼しい」
先生「温度は?」
生徒9「冷たい」
生徒 10「ひんやりした感じ」

作品のデコボコした部分から光を感じ始めた生徒たち。先生は「光や音,温度を感じたみたいだけど,作者の気持ちを感じた人はいる?」と投げかける。

生徒 11「悲しい」
生徒 12「失恋」
生徒 13「苦しい」
生徒 14「孤独」



「小さな生き物が上に向かって動いているみたい」。作品を見上げながら感想を漏らす生徒。



「月光 (六)」菊畑茂久馬
油彩,キャンヴァス
260.0×194.0cm 1986年

生徒 15「気持ちが高ぶっている」
先生「気持ちが高ぶっているって，どういうこと?」
生徒 15「ストレスを発散したいという気持ち」
生徒 16「しがらみから逃げたい気持ち」

先ほど「花火」という発言があったからなのか，エネルギーが内から外に向かっていくイメージで，作者の心情を想像していく生徒たち。また，作品のゴツゴツした質感や，グレーがかった水色の色彩から，悲しみや苦しみという作者の感情を想像していく。

授業が終盤に近づき，学芸員の吉田さんが，この作品の題名は「月光（六）」で，作者は現代美術家の菊畑茂久馬であることを告げた。シリーズ作品であることや画材についての説明をした後，「このような抽象画は，20 世紀になってから描かれるようになりました。色と形の組み合わせ，質感などが工夫して描かれているので，この部屋の他の抽象作品も見て，そのおもしろさを感じてもらえたらうれしいです」と話した。

「それでは，最後の課題です。この部屋にはたくさんの抽象的な作品があります。５分とりますので，自分がいちばん気になる作品をじっくり鑑賞してください」。先生がそう告げるやいなや，生徒たちはうれしそうにあたりを見回して，気になる作品に向かう。



チョコレートのような質感の作品「内と外」（白野文敏）を前に,「チョコの匂いがしそう!」。



横からのぞきこむように鑑賞する生徒，顔を近づけて作品の質感を確かめる生徒，「なんでこうなってるんだろうね」と友達と話し合いながら鑑賞する生徒，それぞれ思い思いの方法で作品を鑑賞していく。

キャンヴァスいっぱいに茶色の絵の具が塗られた作品を鑑賞していた生徒は「チョコレートの匂いがしそう」と，鼻を作品に近づけていた。また，黄色の毛糸が張り巡らされた作品をじっと見つめていた生徒は，「毛糸が使われていておもしろい。ずっと見ていると吸い込まれそう。太陽みたいだと思った」と話した。

そして，終業の時間が近づく。全員で学芸員の吉田さんに御礼の挨拶をした後，先生が，「あと少しだけ時間が余っているけど，どうしようか」とつぶやくと，生徒たちから「もっと鑑賞したい！」「他の作品も見たい！」という声が。

生徒たちは，学校へ帰る時間ギリギリまで作品から離れず，友達と意見を言い合いながら，うれしそうに鑑賞していた。





上／李禹煥（リ・ウーファン）の作品「照応」について，友達と意見を交わす。
下／毛糸が縦横に張り巡らされた作品「月の影;□○▽」（吉村益信）を間近でじっと見つめる。

特集
抽象的な作品を感じ取る

私はこう感じました ——二つの作品を鑑賞して

生徒たちが書いた鑑賞文の中から，一部をご紹介します。



「明星」



H君
こ の３枚の絵は，いろいろな物語を描いていると思います。じっと見ていると，疑問に思っていたことがだんだん解けていきました。トリックの謎を解いているみたいで，すごくおもしろかったです。

Hさん
悲 しさや苦しみの音がします。風は吹いていなくて，木や林もなくて遠くまで見渡せる感じがします。砂のにおいがしそうです。

Yさん
長 い季節の流れを感じました。クラシックの音楽が流れていて，無表情に見える女性からも，悲しい，楽しいという感情が伝わってくるような気がしました。

Aさん
静 かで穏やかな音が聴こえました。別の世界での生活風景という感じがします。

S君
そ よ風，草原の匂い，出会いと別れ，悲しみ，静かな時間……そんなことが思い浮かびました。

Iさん
中 央の絵は，女の子が星に何かを願っているのではないかと思いました。右から左にかけて，出会いから別れまでを表していて，この３枚の絵は１年を通した物語なのだと思いました。

「月光（六）」



Sさん
絵 の具の流れが下に向かっていたので，人の涙が下に落ちているように見えました。でも，上の方が光って見えたので，希望と絶望を表しているのだと思いました。

Kさん
こ の作品は人の感情を表していると思います。上のツブツブしたところはワーッという感じで，下はシュンとした感じ。

Iさん
雨 が地面に叩きつけているような感じで，「ザアーッ」とすごく大きな音が聴こえてくるような感じがしました。

R君
上 の部分がブツブツしていて，激しい感じがしたけれど，色合いから，とても悲しい印象を受けました。

Hさん
ど こか泣いているような感じがします。雨の中で傘をさして泣いている感じです。

O君
ボ コボコした部分から，激しく光が広がっていく感じがしました。

Yさん
凸 凹になっているところから，ボコボコと音が聴こえるように感じられました。



Yさん

自分は「こう見る！」と思っていても，他の人の意見を聞くと全然違う絵に見えてきました。カラフルな絵，シンプルな絵，デコボコした絵，たくさんの絵があって，それぞれ印象が全然違うのでおもしろかったし，絵への関心が高まりました。



Mさん

今まで「目に見えないものは何か」と考えたり，描いたりしたことはありませんでした。だけど，音を描く授業や，美術館での鑑賞を通して，目に見えないものを描いたり見たりすることの楽しさを知りました。作品をつくること，作品を見ていろいろなことを感じるのが，今まで以上に好きになりました。



Kさん

これまで絵を鑑賞するときは，「ただ見る」という感じだったけど，今回は「感じる」という目的で見たから，絵からいろんなことを感じることができました。また絵を見に行くことがあったら，今日みたいに絵から，いろんなことを感じたいと思います。

「目に見えないものを見る」っておもしろい！

「目に見えないものを見る」というテーマで，授業に取り組んできた生徒たち。「音」を聴いて抽象画を描いたり，抽象的な作品を鑑賞したりしてきました。その感想をご紹介します。

M君

目に見えないものを描くことで，これまで見えなかったり考えもしなかったものを見ることができました。自分の新しい世界観が生まれたような気がしました。





Tさん

見えないものを自由に描くのが，とてもおもしろかったです。色や形，大きさが人によってさまざまで，その人の個性が出ていていいなと思いました。見えないからこそ自由に描けるということが，すごくおもしろかったです。

美術館より

今回，授業にご協力いただいた大分県立美術館の副館長・加藤さんと，授業に参加していただいた学芸員の吉田さんにお話を伺いました。

「自分たちの作品」に会いに来てほしい

副館長 加藤康彦

今回の授業を参観して，子どもたちが作品を実にきちんと見ていることに驚きました。髙山辰雄の「明星」では，描かれている女性の服の袖の丈が違うことに気づき，そこから季節の移り変わりを想像する……とても新鮮な見方で，おもしろいなと思います。

当館はオープンしてまだ半年余りですが，県内の小学生を全員美術館に招待するなど，子どもたちが美術に慣れ親しむ機会を多くつくっています。ですから，今回のように先生が美術館で授業してくださるのは大歓迎です。

授業の中で，佐藤先生が問いかけると，子どもたちが活発に，どんどん意見を出していたのが印象的でした。普段から子どもを見ておられる先生だからこそ，子どもたちの心の中に入り，言葉を引き出すことができるのだと思います。美術館で授業をする際，学芸員にすべてお任せされる先生がいらっしゃいますが，それはもったいないことです。ぜひ先生ご自身の言葉で作品を紹介していただきたい。そのほうが絶対，子どもたちの心に響きますから。

公立美術館の所蔵作品は，言わば「みんなの作品」だと，私は思っています。ですから，「美術館に作品を見せてもらう」のではなく，「自分たちの作品に会いに行く」という気持ちで美術館にお越しいただきたいなと思っています。

美術館の作品は「自分たちの作品」，美術館は「自分たちの場所」。そういう意識を，ぜひ先生から子どもたちに伝えていってほしいですね。それが，美術館のあり方，ひいては美術鑑賞のあり方を変えていく，大きなきっかけになると思います。（談）

抽象画を熱心に見てくれてうれしかった

主任学芸員 吉田浩太郎

授業の前は，抽象画に拒否反応を示す子がいるのではと考えていましたが，そんなことはまったくなく驚きました。かえって，大人のほうが難しく考えてしまうのかもしれませんね。「月光（六）」に，光や冷たさを感じるなど，熱心に作品を見てくれていたのが印象的でした。授業が終わった後，生徒さんたちが「もっと見たい，また来たい」と言ってくれたのが，何よりうれしかった。ぜひまた作品に会いに来てほしいと思います。（談）



特集
抽象的な作品を感じ取る

大分県立美術館

大分の竹工芸をイメージさせる外観が印象的な建築は，建築家・坂 茂（ばん しげる）の手によるもの。１階には，展示室と外から中の様子がわかるようガラス張りのアトリウムが設けられている。２階には，カフェや教育普及活動を行うアトリエ，体験学習室があり，３階にはコレクション展示室がある。大分にゆかりのある作家の作品を多く所蔵しており，コレクション展は約２か月に１度，展示替えが行われる。「Oita Prefectural Art Museum」の頭文字O・P・A・Mをとって「OPAM（オーパム）」という愛称で親しまれている。
〒870-0036　大分市寿町2-1
Tel 097-533-4500



授業を終えて

今回，授業をしていただいた佐藤先生に感想をお聞きしました。

抽象的な作品を主体的に感じ取ってほしい

「抽象的な作品を主体的に感じ取ってほしい」。そんな思いで，「目に見えないものを見る」という授業に長年取り組んできました。

まず，「自分の手から聴こえる音楽」を描くという表現活動をした後，互いの作品を見合う鑑賞会をしました。抽象的な作品は，具象的な作品と違い，技術的な上手・下手にとらわれずに鑑賞できることに，大きな意味があると思っています。鑑賞会は，友達の作品を見てそこから聴こえる音楽を想像したり，友達の書いたコメントを読んだり，とても充実した時間となりました。

そして今回は，美術館での鑑賞も取り入れました。授業の数日前に下見に行ったのですが，展示室に入ってすぐの高山辰雄の作品「明星」に圧倒されました。生徒たちのことを思うと，この作品を素通りすることはできないと考え，抽象的な作品ではありませんが，あえて取り上げることにしました。授業の中では，ついこの作品に時間をかけてしまいましたが，それは，学芸員さんがつくった美術館の空間の中で自然な流れであったと思っています。

抽象的な作品の展示室に入り，生徒たちに「気になる作品は？」と問いかけると，思った通り多くの生徒が「月光（六）」を指さしました。前日に学芸員の吉田さんから「抽象作品の部屋はマチエールのおもしろさにこだわって展示している」と聞いていたので，何とかこの作品の凸凹とした力強い表現を体験させたいと思い，いろいろな角度から見させるようにしました。







美術館での鑑賞のよさは，何より美術館という空間の中で本物の作品とじっくり向き合うことができるところにあります。「明星」と「月光（六）」を鑑賞した後，最後の５分間は自由に鑑賞させました。「気になる作品をじっくり鑑賞してごらん」と言うと，生徒が，パンっと弾けるようにいろいろな作品の前に迷いなく駆け寄っていきました。美術館で鑑賞の授業をするのが初めての生徒たちだったので，正直どのような反応をするのか不安だったのですが，その姿を見てホッとしました。

今回，美術館で生徒たちが活発に発言していたのは，前半部分の授業（第１～５時）があったからだと思っています。自分で抽象的な作品を描いた体験や，お互いの作品を共感して鑑賞し合う体験があったからこそ，あのように自由に意見を出すことができたのだと思います。

この授業の前半部分は，20年以上前に当時の共同研究者といっしょに考えました。今の自分がこのように楽しく授業ができるのは，あのときがあるからなのだなと，改めて感じます。



佐藤誠
さとう・まこと
大分県生まれ。大分市立明野中学校教諭。
大分大学教育学部卒業。
大分県中学校文化連盟事務局長，
大分県造形教育研究会副事務局長，
大分県中学校教育研究会美術部会事務局員を務める。
美術教育研究会ＡＥＮＥＴ所属。

授業を参観して

光村図書中学校『美術』の著作者である上野行一先生に、今回の授業を参観していただきました。



上野行一
うえの・こういち
大阪府生まれ。
「美術による学び研究会」会長。
大阪教育大学大学院修了。広告デザイナー，
公立学校教諭，高知大学教育学部教授，
帝京科学大学教授などを務める。
著書に，『私の中の自由な美術』『風神雷神はなぜ笑っているか』（光村図書）など。
光村図書中学校教科書『美術』の
著作者でもある。

美術館でしかできない学習

一昨年来，私たち科研チームは，秋田県の教育センターの指導主事さんや県内の先生方のご協力を得て，学校と美術館の連携による鑑賞の授業づくりを行ってきました（※）。

小・中・高の授業実践を通して得られた見識の一つは，「教室で図版やレプリカを使って行う授業と同じことを美術館でするのはもったいない。ふだん教室ではできないことをやろう」ということです。

そのための手立ては六つの項目に整理しましたが，ここでは「事前に美術館での授業に意欲をもたせる」「美術館での作品の出会わせ方を工夫する」「学芸員の専門性を活用する」の視点から佐藤先生の授業を振り返ってみましょう。

見えないもの（音）を表すという学校での表現の授業を事前授業として，生徒は美術館で抽象作品から音や光，感触，そして作者の心など見えないものを感じ取る鑑賞の学習をしました。表現と鑑賞を関係づけながら，「学校―美術館―学校」という「授業の連携」が指導計画されているのです。「事前に美術館での授業に意欲をもたせる」ためには，生徒の主体的な取り組みにつなげるための「授業の連携」が大切なのです。

「美術館での作品の出会わせ方」にはどのような工夫があったのでしょうか。生徒は美術館でまず高山辰雄の作品を鑑賞しています。愛着のある地元作家の作品で対話による鑑賞を行うことによって気持ちが楽になり，心が解放された状態で抽象作品と出会えるように工夫されているのです。

P4の写真をご覧ください。この生徒は何をしているのでしょうか。疲れて壁に寄りかかっているのではありません。彼はほとんど真横から絵の表面を凝視しているのです。教室で図版を見る授業ではこのような見方はできません。凝視は作品の細部を見るだけでなく，絵の具の塗り方や重なり方，彫り跡や材料の使い方などの情報を得たり，そこから作家の制作過程を想像したりすることができる見方です。このように上から下から斜めからとさまざまな角度から作品を見ることや，近寄って凝視することは，美術館だからできる見方であり，学習であるといえます。

「月光（六）」を鑑賞する際に佐藤先生は「じゃあ，この大きな作品を鑑賞しよう。近くで見たり，下からのぞきこんだりしてごらん」と指示しました。すると，生徒たちはさまざまな角度から作品を見始め，次々と意見を出してきます。教室ではできない見方を意図的に指示することによって，多様な見方が生まれたのです。

作品ごとに学芸員さんが最後に解説をしているのもいいですね。教師と学芸員それぞれの専門性の連携によって，美術館でしかできない学習は生まれるのです。

※科研費（基盤研究B）「学校と美術館の連携による美術鑑賞教育モデルの開発」
（研究代表者）上野行一（研究分担者）一條彰子，岡田京子，奥村高明，東良雅人，山崎正明



特集
抽象的な作品を感じ取る